へ 5
4334
1

へ5
4334
1-4

へ5
4334
1

長芸集元亨釈書などきこえたる
集編あるをもてその号をやうて
あとをむせたりこれハ延宝ハはじまり
く寶永ハ終るその間五えをあらため
まるゝ故あるゝ晋子の滅後
かいつてまれ人乃家ハかりともたれ
ともてそもも正徳より今延享まで
かこれも又五えを経てその名
乃久しくきこえ此集ハ世かいし
なるやこゝ国ゆゝもとゝまゝ

とくまるおほん神ふつふ大德の事の
古代の物このごろ多くなつめもれ
中に此書もこの法師をるうきこと
おぼえ宝とめてをのぬをこめしら
小姫うくひめんの法連もゆひけつ
法師をすする宮奴の枝の嵐よ祈る
をもいうるうるめるやかをいれんれ
ををのつるる歌内志をる此のをを
をもい縁を求めてをんををふ
めるを大德うけさるさ尼すてむをつ人の

くるのこをとふやきふうりいて
を帰をかへてかるこをゆふいと
るれいまをもうれ得やふし
人をを月のうれかつのこをさをう
ををあ一宝寺もをとりこれををく
先師のぬをめるめをんとをのふ
ありひてをしをこをゆふさまうや
この法師をふく物ら人をきこよ寺ら
よくをるるをの物ふれはめり
物ひしこをかりてををむる

よゆるされて彼家ふやきたる
るを度をこのうちよりかけきうつ
うつして衣通姫の座ふ七日まで
さちさちはちし者のこもたこころ
さすやめてさりけんからしてあ
てうすまうこひまうひもてかたりかる
よみのうぢを中よりかまをめふ
草稿のやうよりなる本の墨八
十八を一冊とせるをまて著子れ
毛澤今ふをううこうらはくも

たうしくもあれるまめつしくるまは
ろしのかんさをはてかたりこうちも
くやとありふもあまを城へ今ハた
しめすりのおねさうへと橋よかあ
くかくをこてふふ紙成といふ筆
をうて氷れ下ある魚を画くうこ
とくうを点をきうへをうつて梓行
し世の晋るを高ふるへとこうろ
さしをおあうへし伝ちぬ

百萬坊青原

五元集

延宝　天和

貞享　元禄

故横岩有業氏
昭和四年五月
寄贈

外三冊

窪晋齋ハ米元章の硯の裏ニ
鐫入ル所の号し三平子其硯
を弟子ハ何人て窪井晋子ハ
いへと此号写しくらかてりとて
筆ハ[illegible]たに迷ひるをやそ
伊玄龍ノ額を需てしるすの

軒葉よりけうらめ桃青門より入て
延寿乃ことほぎ永の万ゝ歳をよろこ
より室永の万ゝ歳をよろこ
いへるもしるしなり　　其角

五元集

四十の賀しるべる家よて
沛松庵より墨を摺せて梅の
遊大音寺
んめくらく会の家も祝うく
加列小松観音寺奉納
梅の花且那を語て庭おなり
芭蕉翁のゆかりあるし
うりて紙贅をたけるよ
せめてもの会之柿よんめの花

曉

を上よ冨をうまてやむめの花

不曲亭

あせを紛目あてを梅の匂ひ

こつとりとはのやむおハ萩の梅

ちつりさ枝のさけ目や梅の花

宰府奉納

宰梅乃舟のわさし野老賣

和心水推敲之句

さくさくはるよさ月みち梅の門

摂津氏　お祖父大坂

表の軍功よりて　沖右刀を拝戴

沖感状　沖右刀のあとや

せうこはの正月十七日の夜

池井上板橋に於ける家に

十七人とし家の見おてを

そも正月十七日後閑の頃

何ゆ其零家督執權とを

けものの於序あ

幡抜を文臺服やむめの花

元りさ[illegible]の
日を祝てとりあつめの
夜光る梅のつぼみや貝の玉

信濃守[illegible]の所望よ
月ゆゑ[illegible]のひめ玉章[illegible]
佛梅や[illegible]

外様と手向の梅を梅こそ
元孫[illegible]

聖廟八百齡御宇[illegible]
[illegible]御社[illegible]連[illegible]
興り一[illegible]

梅松や[illegible]
氷肌玉骨とこの

音ずれ花もあるも梅の皮
久松肅山亭よて
梅[illegible]花岩の星乃白ゆゑ
百八のうそ遠や 周[illegible]
芭蕉庵をやどして
[illegible]十月[illegible]も同じ[illegible]
[illegible]よ京教人色のあや
脫神の[illegible]梅乃[illegible]
節木[illegible]
[illegible]の[illegible]

うらいすをいてあらをん移浪
茶臼すとりかる絡み
ゆく水ゆくゆく色ちかつ山
茶摘すとりかる色ちかつ絡よ
うらいすの曲る枝を削らん
ゆるふ所ゆくとしひらかへる
うらいすやを祝ふうら永遠
市隅
竹とらんて常ゆくう竹虎斎
雀ゆくゆく隙ゆの竈の紀

とらいあらや
うしとらふん

長崎の紀よ陳家の紀
とて西ゆすりてゆてふに
佛をとらんにゆ屋をを
いつあれや船をおりふあ
ばゆおくりんをむまのを
のゆつる長崎をおのを
土手のるくりんを無下お菜つ於
正月巳ゑ布施の弁ゆ天へ
諸仏ゆ年納
玉椿昼とゆみてゆ布施竈

梅津硯水會よ
窓物やれと拾ひころひぬ大蘇甲
ひ月サ五冠里公より伝た
葉刻この上くを掬る蕨ゝ
接方を画て
末おせるのや迷ゝやゝつん
十一日
お計粉を還城樂のゝもと外
京清ゝ不帯みせぬや二蕨
漸覺春相泥とらふ切白
削ゝけ膏薬ねりの鼻おあれ

畠のゝ沼中よりつしわるあつを
二人しつのゝけあり
おつをゝ扇云をとふこゝふ
百人の雪掻志し蒔初也
万葉志ゝ所ゝのゝ朱雀の称也
さひゝこゝ小西の虎ゝ
ゝ部ゝ白る蒔ゝ
七種や明るぬふ鮮の松ゝ
ゝ中ゝ沼ゝ名鳥
砂植の馬蕨ゝ蕨ゝ初ゝふ

渓邉双白鷺

河州八尾
娵そ里

流ゝ鷺芥掠は流るゝ
うすら氷やひつかゝ咲る芥の花
一森ハかうきぬより蛾折
石下ゝ清なる流やむすき硯
白魚や海苔ハ下邉の買合せ
打むせや何かとく浦の里の味
白魚で漁翁か薦にはあひ添ら
白うをの罾に掛らばひとつ来
陽炎や小様乃ぬかしれた沢

志らし下女に
てあさみも女房もせん水祝
衆嵐へ懐の夢をひらきて
引つ逃て松をくいる嵐かな
寶引小鳩牛の角をならくせ
帯せぬて非凡なしほし踊妾宴
雑俳人神の邦を祝りて七人
句をよむ海中に大黒殿をん
決めしせるそ桜ひとつ咲きり
年寄に桜の口ぬく小抱かな

三月正當三十日

山吹も柳の糸はあらそふ

梟ゆあたゝめ目覚や朧月

蓮しや太神宮へ一つゝ

[illegible]や天氣定めて梢下

格枝繋馬合ふ

[illegible]し斯[illegible]ゝり稽山

禁固ヲ破リて暇ヲ玉ハルし

[illegible]見惜い新[illegible]父乃[illegible]

[illegible]入やそしたいかたの是も星

故赤穂城主浅野内府監長矩之舊

臣大石内蔵之助等四十六人同志異体

報亡君之讎今茲二月四日

官裁下令一時伏刃齋屍

[illegible]のにしつゝ黄舌[illegible]ひるく

肺肝をつゝぬく

[illegible]ひまは芥子酢ハ[illegible]

富森春帆大言ゆ葉水海竹ま

[illegible]ハ焦尾琴も[illegible]

[illegible]

黙印半面数人の字を彫て琴形の中に備へ〻れをはめて冠里云の万句の序巻に抑弘め侍るとて

まの月ぞよ書はめる

悼後立老　初音八女し

昔うれ初る三井寺の桜

題水

ちく万河のまゐり水や餃の髓

屋賛

拾ほの風巾ふるむや玉箒

ゑふやの風る水くへ和る寺

金井や色書よ所でも稲荷山

数入や一ちあるうゝや等

やゝ入や牛合ゑゝ大原さ

元祢丙子のゝむ月まつゝ

海苔うゝ出山るのあをひ行り

畠中の梅のわつえんを六分沖

ゑう蛙のかゝをたつけて賜乃

草莖なゝしとおゝ侍る

草莖を句むゝ塔もゑを雪乃ゑ

切牛亘ゝとはゝり　柳ゝふ

御忌

人の世やのとかある日洩る林

本多総州公子にて

春風や菜津の鞭のゆるハかり

浅艸川浪舟

河上ハ柳しんめり百千鳥

柳にハ鼓もうつす事もなし

搦手や柳の曲をつる　不狙

市川老牛追善

一子九歳名残つき候て

塗師の父ハあらうや雛の色

菜苑

黒柿麻てこそあへぬり土筆

春雨やひきとめハ柏津し

[illegible]あいさつ

園の春のちりかいとふ梅の袖

新三十三間堂

[illegible]やすきの箭ゑも衣紋

菜[illegible]

青柳よ梅梅つゝみ[illegible]地

柳上洛の図よ

[illegible]

[illegible]城の賢ちるふ中柳

春雨

[illegible]しつゝ[illegible]の雨[illegible]

[illegible]日[illegible]

二月十[illegible]上京[illegible]

西行の死出旅を旅のためし

[illegible]永[illegible]六唯乃る彼岸[illegible]

佛若し大晦日より入湖みて
いろふ仏ともとんちやくす
へきうるふ家をのこめて八
往生をふのそのをのをの人
佛よりふ仏くうの花おはあふ
山里の名をあつしや伝説
初年の盆をんさう地蔵尊
とろろを色大原の里ひらう
野嵐のこれをくんつく
竹のもや柳をるね落のう
柳のやは一すをふをたう

二月十七日原驛
五十土の勝都のちまんて巻ん
おはらやふ松の黒さよ月おは
鄰焼の仏を鄰の居を向て
一指より玉子を送ん人
ひつ〳〵ふやをの玉みを十をおむ
傘や南都の何をふ 雨
傘や薪の毎の何ををを
無車馬喧
夕日郭町やみむこてふ

見獅子俗有感

[illegible]

[illegible]

[illegible]

釈 菜

聖堂おこはぬ[illegible]の[illegible]

百[illegible]せいねり葉乃こてふ

柳燕圖

[illegible]

茶の[illegible]

西[illegible]

燕や[illegible]巣を[illegible]

階子[illegible]

湯面の[illegible]

傘[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

角田川にて

[illegible]

湯[illegible]

小田[illegible]

蓑かさ
ちくさ引 蝦夷そつる 消うふ
帆柱のせみ みよりおろすさと雀ふ
苗作や 度ぎ江八ほる 畝ぢひ
ぢねもらし 俵よ海すふ 松ふ
景政ら片目をひろふ田螺らふ
みれ沈うそうぢるよ
孫ちち乃蚕やしあふ日向乃
ちちの葉の葉よ酔ふ尾張

泊徒岩城子逗留さ
銭ふのの ふるさを眠なる
ふ ぢ作ふ

杉ふ山や嵩ふに世ちち叶庵
南村千湖伝蔵くるち
乃春や 拙ち是 故路乃 志貝
富士乃絵子のそま小作り
三帆舟八塩屁みなるふ江ふ
小ちをふ ふるやしる 松乃小松子
貝の笠をふんちと くるち
句をすく わけるつ ふて
松の色をう しんて や貝のやとり

いせの[illegible]を[illegible]
馬[illegible]
偶[illegible]

四睡圖

[illegible]

三品小酒井村就音女[illegible]

[illegible]

或[illegible]
[illegible]
[illegible]

能睡　[illegible]
能忘　[illegible]
能捕　[illegible]
能狂　[illegible]
能眺　[illegible]

自況

[illegible]

足袋をつかねて猫や雪の中
猫のつれ托んつかれつれつれ踊り
市川喧
ぢけ本屋のつまなる見れば雨蛙

きを延醉帰の名残の内で
かひあくゆん　春の夜の女ぶり素人すあり

宰府楽屋の舟中
葉の茂り乃ふ城を御角ありけり

醴よ桃李の酒人　紙屋
鶏の狩るよはくく逆毛か
玉子曲に出たれて
あ吾を烏帽子さん岩て
曙やに桃の鶏の声
鶏ちそふ桃や妻籠城の脇踊
傳て雑の宝や延長殿
ひんてのミや盗まぬ雑ハ松浦舟
おはしなる本ものり雑社炭

雛やうの碁盤をおかれけ
ふ四方のかりけ
ひふやうの伊野のひろの草袖
昭のひかり清水坂を一目の車
打菓子や井筒まゆて雛のけ
雛のさ海宮服〳〵よ海〳〵ける
永代島し幡こゑ
汐干やしてうをてこれ次市貝
鶯なくむ比目を踏ん汐干や
紀国の朝鶯つをを汐干ふ

第酌お酌

まとこの雛や雛は菊て小盞
曲あるよの氣達ハ茶碗か
菓子ふ島よけし人形せ桃の
曲水や筧海ふ汐宿なるも

綿ゆりて初ひおそりう雛の京
ゆり云を雛ち懐め亮の母
雛くれ世人を和尻の梭ぬか
緑豆(ヤハナリ)の形も白〳〵桃の眉

須磨ハよに小あむやとり合
貝そろへを当る竹小
蛤のしらもはさむら玉柳

祈露云あらへ沸浴養の江
たちんけのなせるべきよし
御あり之歓拝の御書とも
呼かしけるけ
御息所の前のなかれと山城に
露沾伝沸庭まて
深ゆくらまてらん月この初桜
縁かうこあり思ふや花の庭
地神やむのかくい松ちり
花のん紅毋まつれなる盲児
いさとくる小町ら姉の名ハしらに

黒谷にて
百日のんれもちとせ遠櫻
仁和寺
ひとつ戸のやどりなめり櫻哉
上野にて
深川で鹿島さんより櫻
妙蓮寺より花送る
文へ改る櫻ちりて仏像
花中 尋友
饅頭をくらふまる山櫻

一夜を祐上いと招れて
初櫻天狗のくるしみをせん
友情の友きくしすが花衣
三月廿九 合歓亭北
山ふかし市住
市近や花のこゝろいかをきて
門柳 華をはらふ形かな
うぐいす啼
市用よりて児うへすが花の名
矮屋書 如の膝をしるのみ
なるべき心まとゝ酒を呑て
傀儡の鼓うつなる義経弘

表中印
面上右西湖

石河氏宜雨公の山庄を
美景をつゝめて四方の四の
風情をもしたがへぬ
二節の角豆の山ゝ
護國寺のあさ
白雲や物よ所の新八幡
立雲をあそれば
内裏にはゝく主たる人の花衣
京よりくるゝ
花の遊て歌舞よりて都の
夏よとすれば棒つき出る物出

山桜猿を放て梢の
物あるの碑なつるん
祈る乾物なる女ハ
仙産
花ゝて表書院をお月代
物よ来て都ハ幕の盛ハ
兼盛ゝて
ゝ盛ゝ
世ゝ五ゝ己ゝ

目黒松隣堂にて

深世界を梦よ咲ぬ山桜

越東叟山三句

小坂や松よりくれて山桜

八つ瀬乃山ゆさらるや一叺こ

人を恋の楽やをふよる

茅地山ゆさらるを

明星や桜ちらめぬ山うつら

打ちて殺生偸盗あと

行くと花よ五戒の桜ゆ

行雲云爲と市庭の花をゆり

けりそこりそこりをちこちをり

花を問ん使者の如なる月をゆ

ぬる子方三を作て

そのまもよあるそこちるや盃

酒のにちふよさらるを花を

かむへさらるを

ちるよ漬味みせそし塩桜

惜花不掃地

赤蚊帳もふ多寡ゆるうり

雨ゆ

さらるもる原を五ゆ八をはれる

上野清水堂にて

[illegible]

[illegible]

日論る[illegible]の俤と迷ふの[illegible]

[illegible]酒俤よりも俤ん塩[illegible]

一食千金とや

津国の何五[illegible]せんにしら[illegible]

辛未の春上巳なあそべる日

門主菟道のよりを[illegible]て世上

一[illegible]

其沂生[illegible]の二[illegible]や山にしら[illegible]

王維山水
寸馬豆人

花[illegible]

上野御

[illegible]徒士[illegible]立る時乃花[illegible]

尋花

[illegible]木[illegible]の亭を留[illegible]

[illegible]

車[illegible]花[illegible]

[illegible]笠を[illegible]せて[illegible]

酒を書[illegible]

此雨[illegible]

永代寺池色

池を呑犬年入あい花の紅

南盛さしめて上京す

花て濃伊勢を仕まへて裏紙

大悲心院の花をてんぐりて

灌頂の間よりもて桜ホ

茶もらひ夕ひ晩鐘を山桜

打ちてる花の間乃せうるホ

沿号鷺や鐘ふの原初さくら

四方の山るる　桜子

四条の花のうつや鄙ホ

小名居ハ七ものの弁うつし山

月ものよ山に雲のホ新は

亦是より木色一ぐ打つしホ

菊咲て禮ふ日をかてゆう

旦夕ぬきむるはゝホ

新新や龍ヤる菊の相

心ものを所紅ちんもを岩つ

ふ仏ふんぬ石の五体や菊ホ有

白菊を酢みをまつふ雪ホ

[illegible]

[illegible]

錦おもも[illegible]の風を惜[illegible]

三月十二日含春亭の花

[illegible]百五十余枝[illegible]延[illegible]

植足ふ三切の供や[illegible]

同[illegible]入相

[illegible]と花乃名残や節扇

秋船[illegible]

[illegible]や後[illegible]扇元

龍樹菩薩の禪陀伽王を對して

貪欲を去めしめ[illegible]

有癡人近猛燄堪雖悔後增

苦の文のこころを

雁瘡のいゆる[illegible]

広[illegible]訓出記

一目已羅不能見得鳥之羅

唯是一目はみのこころを

[illegible]猫の行[illegible]

意馬心猿の解

立馬の曰を猿[illegible]義心

雜司ヶ谷にて

山里ハ人をかなしの花見哉

桜のゑ白くあれ
ゆりせきゑ人一ゑの
おもかげ

口の三浦云侍從みなりて
寶永二年三月廿七日ふ
京使ケ[illegible]めを祝して
義仲ヶ[illegible]れ七人茶屋やより

芭蕉の自画十三懐周之讃
帥の坊乃十字ましし柳集

[illegible]ゑ[illegible]あや和ゑ書ゑも時分
雪の乃面起すや[illegible]
淀舟や[illegible]
夜這星や[illegible]
官城
歴[illegible]
[illegible]
川[illegible]
[illegible]
[illegible]

百間長屋にて
時々人の博奕する事
不絶一二の檣にあたる
院咸の三味線ひり時なる
仏廊
時々つゝき傘を買せり
京井山
夜にて手提行燈の数能
手ぬぐひの用をなす月よりなる
寮坊主のまゐり所なりとぞ

宰府を納
にて手ぶら居くと却よろ
林中不賣新
せよ山なる町たつを
ぬる江と以村あて
くゝふ形場の日陰やなる
禁る五加りおくをはやきに
曲絃人不見
吐の反吐ハやふりゝ新玄
時なるハれや蔦おひりれきん

子もなくて桔もなきぞ時分
母におくれ侍りてのまへ
あさゆめのさめる暁
芳な母をなくす郭公
松風の戸を侍りて
あらたに小れとて
夏の間妹なひくせなくなす
素ゑまて
蛤乃ちりまて峰や月と見ます
それよりて松風鳥や郭公
幾滴を硯に奇之ほとして

白文
人夏の四月によけ色　郭公
時鳥茄子も三ツの小袋かな
うりけちあら人の老子に
ねらひやまぬて
郭公憐みあはしをすめるかな
月清て暁ぬけ比や郭公
六阿弥陀あけて鳴らし子規
浅井す樹下
出つるや杏子よるん郭公
葉まかて画れぬ梅や郭公
なほ京に出る時の　孤蔵

時なる人を地走の家ぬぎおき
月の上なる月をうくるや　子規

夢昼

妙八目みよ福寿を法へ新云
姉う嘆の野辺忠切寿四を
きたりめされて禄をぬいと
ふるふ　せうきさて作を
起てきけば何なる市云不記
佛さくこの世をふるうきさま
たやけふはいとれもうん
夢餓や母ようきとて仏生寿

風光別我苦吟身
大酒よ起てものうきを袷か
新寿四よきぬさく寿や新更
一ッとつよ袷の風や黒糸うと
卯月八日母よおくれて
丸ものとりて衣うへうきう月に
慈母墓
花ものようわやしの寿
上ひけるる寿
灌佛や拝なる列なる児

紫白金
年寄り日ごろの名ある
殿つくり並てあり　相の家
又のもてなし
うられぬや異見の涸むら杜丹
いまだ見ぬあれたるその牡丹哉
河州新心寺
楠の遺ぬるかり　ちるん哉
志ぬ史の後ようる牡丹哉

雨意　艷士なめて

ハやるをうつゝみ知るちるん哉
池田の所業を背柏の枝を
あつめて集あるを
さしたうし甫あ史ともにかこ美
乃所ゆ中の一日
隠岐殿のうへ　百里　全ゆ　甫盤名
上京の的　三十三日の此亭
窪永冊元　奉都使
伊作美の人の歌
とゝ氣て伊せと誰う夜ゝ

屏風ゝ義房つ仕するの図.
迷ひ子ゝ伝よりこし時雨

長崎名所の風景ら家ゝ紅毛人
貢の不く奇なりとて
桐のむし彩度の器諸 不言
愛娘子
鶏啼て玉子吸物ハ有り
序令初めて上京ゝ餞
涼ゝ都のそゝや連中金

楊州雇

護国寺ゝあそゝ
水漬ゝ用てちすや 牡丹
そゝいとゝ
蓮の葉も
笠おりゝ
寺納
このゝ
田家
ゝとめゝ足
汁鍋ゝ笠

水賀入湯のころ

ちさとやお苗ようるるの門

袖裏や茄ありけふ白くさ

舟ゆけば均を吹や夕ゆ雲

卯ゆゑや蛎うるものを乃くア

ものゆゑやいつきの御所のか芽治

宵幻吁長老

老僧の箇をかむふるふ

筆ゆ竹ゆりおくよ大ゆん

竹の屁をおれ節ゆや五月商

筆やよゝふるの　鎗の鞘

素堂居

蚊ちゝ戸ハ皆吟ものを　ゑの蚊

桃子居

蛍蚊や家ハくれて沛用芦

夜ゆや橋墓ゑして　河面

目面の罠の模や　漁ちゝ

吐ぬ移のおむよ　ゆゑ海ハ

移ゆつれて一里ハ　岡の松

筆ちゝ忘れ耳やゝ　ゑ

戸隠舞ゆるよ
神前の張小己日の足者ハ
帳をちろすと毎ハ舞り嬉うれ
夕塩やおの百まあ中かう
ちうすうを面るの
世中をちうしてしハ嬉うを
飯部の鍵おつうを都ハ
和泉詩ま
保せおそも松魚ハ酒宜
こよろうをの名ハ昔まそうぶハ

呈高江公餞
節木やハ人るへうつる五月雨
ちうれやをそも弁を面るハ
就ぬ田なのもうを六月雨
ちうれ山の煙乃を屋ハ
ちりる和や傘おはるハ人形
さうれを酒勾てなる和茄子
巌肯隠殿乃大法るを
ち敏ハよ物ミまル
ちりる和のをも休むり法の色

市驛吟

百舟とかゝる鰹やけふの組

花あやめのぼりもかる嵐かな

公門に入時

あやめ白く明り障子の二とかな

鏡湖を沼になしける菖かな

ひよもけふあやめも　ほやめ
かけぬは宿そあやし
やとかほとね　絶なれし

郷へふくておあめりと　伊せ大輔
家の　[illegible]

菖まて蛙のつくる　ほやめかな

けふや幕をうかさし白妙
二色の肉をやまれて打との
古郷とよめこゝりとの方ねも
その人形の風俗と代るま
小家あとりすへ人形いかし

新むかし坊主あまや花菖

五月ころまさすせん　家よりて

屋根葺と並てかけり菖かな
あやしめる女の竹の伏すめて
[illegible]

山笹の粽やせめて湯あつく　さこ

草の戸やいつとしるらの中の粽

本所しら久へをたゝめて菖ふ

五月十三日

雨をや布も酔日乃人へあつあ

藻の花や金魚まうらるいる笹

酒満

菖の花乃酒典童子も二面

青嵐といふ歌を

海松ふ多ふ杉の花や初鰹山

蝙蝠の屋ふ多ふれあやあ笹

文代の葉守の神や加柏

疱瘡ふ加ふ多ふ慎ふ

緑槐高處

ふ多せ三や笛ふ髪を十文字

ふ乃ふ乃酒の香ふ這せふ

漁舎やむ乃の角乃姫牛

ふ乃めてや牛ふ生ふふ

文七ふふふ多ふ乃ふ乃ふ

河原町あて

妾ふ家ふ乃ふ乃ふ乃ふ

宇治ふ多

川ふやふ水ふ二重ふ乃ふ乃ふ

[illegible]

蛍虫の墓おこられる命ぞ

谷中

風ふのぬ森のつくやうな

俗ものを

俗らよ貝ふく俗よう紀

下やこや 蛙根性のふくれ声

[illegible]公淄池の高閣よ

[illegible]ゆたとなせあるとを扶とを

蛍ふよ我八御[illegible]ふるあ

宇都宮入道

蓮生八高ハよりぬを出扶ひ

樺脳よ代をゆうたの鎧ふ

よあり地しぬの松う土角ハ

扶人や木州よりて土角ハ

浴衣義て紀貫ふ袖ふ

祖公 淄池よて

紀むいて猫よくふるなつふ

水殿ようハりぬ紀の つくハ

手紀やうつむけてわよ器小舟

紀のよ小ふてよ 流れうり

亀毛お鍋

花の傘笠八重とりたるうち

破扇の図

雑光ゝ家なく扇

烏帽子の

紅よりちふのつきたるの白

せミ帝や床のうしろ図

隣りうしは水にくむやせミの毛

竹のせミたらよ者ほるる時も

あうてやせミも雀も地を祖

白雨や内侍あるく物語

市中自雨とりの記

春よ香もみうりよ腥

自雨やもりもとゝもれを嵐の

ゆゝしたの学あつく雷

夕立よひとりかゝる女うち

中鳴三遍の赤蕨あり

雨乞するものおうりこの

夕立や田をつゝめうの赤おた

翌日雨小原

舟中吟

たゝうたの籠ぬるて里急ぎ

西行と弁慶対面の所
芋虎にて所をつむ
けんまくの強きはあの男
土用のいりとなるのいと
第不る茄子ゆるゆる
鳥山おもむく
まき柳やつゆ袖ある板の色
りのやや白き路傍根より
略焼ハ名人を考る世界
麻村や家をへらるる車

鹿人の踊者稲荷宮にて
すまして
芝の浦を吉次の冠者ゆ原
ゑのおく 鹿ゆ氣の紀ゆ
生死去来
烏ゆ蛙ゆいつくより雷の声
捕虎 赤坂
七ッ色の蛙ゆるゆるむや足疾思
蛙ゆ様ゆゆめのうき裾ゆるし
蚊をくく 麿姫の国の私恋
やりやや蛙ゆつる方ゆ老 猫

更雨

石竹等の花面に清らに移る

いきけさはずてんどうと

うちたゝかれらさめてほ

切れるを見ハ誠ゝ蚤の孔

旅店

雨夫の雪幌ハ酒屋に折りゝ

あるゝ犬ありて盃を二つ引

割て盃とし犬ハ盃さしのべ

肉ハ桑に塗てやるに犬ハ喜ぶ様

をゝらせてなをもとめ

清水の教者に曰ら面にようゝりゝ

形目鼻ありさりんのやうし

浅草河歳に吟涼

ぶゝ我舟をれてそれ三ツ

川涼に船に泥せる 泳ぐふ

涼をつむ安斎や上総に舟ハ

すゝしさや帆に新のちも髮

舟暑し飯ゝれのそく園の新

千人ゝをを樹や橋ゝたん

涼しさや先市茶野の流星

鐸退之搖酒吟あり

酒ゝ舟をゝゝむ涼ゝ

こゝ[illegible]

此碑てハ江を哀まを蛍火

牛御前

是や皆雨を吸んちすみ

橋上休老とゝ[illegible]

は泥む老の歯ゝや橋ゝ

舩を玉ゝて[illegible]

海を見て涼む角あと鬼屋

餞久松肅山

筆をさゝ[illegible]

人のふをめて

涼しいゝ癖てつもり刺ゆゑ

画讃

大盧涼布衆の移のゆく所

日枝よもゝひの川邊を

十八の姿に神つまよ[illegible]

河原まて

姿を牛にすみ車糸

は枝よりつゝ風もり[illegible]

動者の月あるゝ涼ゝ

暑さ字　いとなりて
むかしの面の赤鯛より面る暑さ
呈餞　霧江公
供ふ人の輔の暑さや岡の松
人まつ暑い新蕎麦　端唄
自棄
きりの新昼寝
五月十日　雷雨
菊屋
四万石のうち神なる時て鮓の蓋

住吉まで西霧　矢数俳諧
せしはるよりくれた
礦の出て二万の蝿あり
七十余の老翁つまりて
くもこそ
暑のるを
いまそうけ
ふるさと
おりいよ
なるまて
いるさと
六尺もの力
村田愚菴

辛とのの毫秋の江のさ社み田
アぬゝ
ゝるゝ乃なゝ霊仏灵祠一寒色
廣殿あゝ乃なゝさて興廢の事
時の用ふ乃のの事てらふし
れをうゝ暑をちゝに霍
らいゝ乱出家のにくゝなく悔乃
ゝくに乱ゆてゆゝふ行程の
遠迫を辻番ゝうまて

陶ゝて思を振弟水の下白を
拙天あゝれゝ
夕影ゝあゝ搭らけし賣名号

昼影ゝ来操涼む色也
故郷のを絡ゝせて贊
のゝゝむ乃のをその絡ハ人白
乃ゝ乃書ゝうるとたゝい
乃ゝゆゝ自句を弟乃

夕影ゝ一臼乃をす品の宿

逐歐陽公賊

蠅のゝ乃兄ゝ舜ゝ子乃ゝ乃

昼讃

蜻蛉の小地ゝふいゝし車百合
ゝ子ゝ肩ゝ月ゝゝつゝ迫ゝ旦

魚市涼宵

楊貴妃の夜ハ治まる禅かな
七月七日霊文を感して
東湖の蘇生人天は誇ゆる字
出無筆に欺かれても蓮かな
荷切や下々まし切た笠き角
哥仙貫之の古画に
冠をも指をそふめり哥乃行
素院亡妻をいふて
周忌ハこれや世を変の海
上下と裸の夕かな

あ海帝よりあさう俳書
しらぬけしさんせよとあり
篁や扇の知連を垣根に
とおてよりちるさして
ます軍織らるる扇中
さんでませぬかの再ハヤウまて
塚れやる一もすまく女ふし
鬼のやう あら惜しいちのくへ
くらよそ祖親はとゝあられ
吴例して何りのりんや
介抱せし衛生のひて心よ
いきしみやも落つかくはまよ
兵共も会養惟や凡留
兵守や桂の生例よしてより

新おの人の土産をめて
皮廣てのうちをかりし合作り
鍋釜とも小ふくろ大ふくろを袖て掛
元角田川牛田とりの小ふくて
いそのうへはあこうあの稽
船舟綿よ用まうて
貫之の鉢のすゝ小りうまふ
さるんけの一首を扇に書て
生の松りのうしをよた
木曽祐之や浮引味を考る色り
市原まて
出さむと杖求の小町干れうり

ものとも林檎ハ油て面白し
百日乃参あらゝ為ゝや況ひ鉢
四神よ弱のけありや心て
気のめ法れうまの祭ふ
七日
神すのる人の子ひも新ふ
山王の氏子て
新宮と天下祭や　土くま
番附をうも水の子ひふ
松原よ田を参や昼体を

其痩ふ能因しうもか食し
ちゝ会いは天地を着る夏衣
高閣挽涼
香薫散おうねおつて主の峯
物福なる宮居のさとや一墨
蟬をもてあすんそ
うきし舟の浮しおやへかなの甲
ぬてうとく蓮おちそふ鈴歌
大雨大風
吹降の合羽そよく沖後か

4-22
49
1629
正年